

石垣りんの初期作品

——『断層』『女子文苑』『少女画報』掲載作品をめぐって——

畑 夏 希

はじめに

詩人・石垣りんは八十四年という生涯の中で四冊の詩集と三冊の随筆集を刊行した。その数は決して多いとは言えないが、石垣りんは永瀬清子・茨木のり子と並べ称せられており（水田宗子「モダンイズムと戦後女性詩の展開(1)「わたし」という個体（上）茨木のり子と石垣りんの表現主体の形成」〔『現代詩手帖』五一巻（六）一一八・一二七 平成二〇年六月 思潮社〕、今も高く評価されている戦後を代表する女性詩人の一人である。

石垣りんは三十九歳で第一詩集『私の前にあるお鍋とお釜と燃える火と』を刊行し、脚光を浴びた。その詩集を刊行するまでに、投稿誌や同人誌を介して作品を投稿・発表

し続けたことは研究者には周知の事実だが、その作品について言及している先行研究は非常に少ない。

そこで、これまであまり調査されてこなかった石垣りんの初期投稿作品を探索することとした。その結果、幸いにして『少女画報』『女子文苑』『断層』それぞれの雑誌に石垣りんの投稿・寄稿作品を見つけることができた（注ただし『少女画報』は全てを調査しきれているわけではない）。まず本稿では、石垣りんの習作期ともいえる雑誌投稿時代及びその流れを受けた同人誌時代における発表作品をリスト化し、これまで収録されなかった作品について触れ、検討を行いたい。

なお、『少女画報』『女子文苑』『断層』に投稿及び発表した作品を一括して「初期作品」と称することにした。

初期作品のリストの前に、それぞれの雑誌の特徴について説明する。

『断層』 女子文苑社（一九三八—一九四三）

女子文苑社の社友ないしはかつて社友であった者を同人とする女流詩誌で、賛助者福田正夫の指導の下に発刊された（『日本現代詩辞典』桜楓社 昭和六年二月一日初版）。

石垣りんは、『断層』においては「石垣りん子」を名乗り、第一号からほぼ毎号作品を掲載していた。

『女子文苑』 新醒社（一九三四—一九四二）

白鳥省吾らが発刊した女性のみの投稿誌である。昭和十六年九月に『断層』と合併した。

『断層』と同様に石垣りんは「石垣りん子」と名乗り、九号からほぼ全ての号に投稿しており、また詩だけではなく短歌や俳句、散文など多岐にわたり意欲的に創作活動を行っていた。

『少女画報』 東京社（一八七二—一九四二）

絵雑誌「コドモノクニ」と婦人雑誌「婦人画報」をつなぐ女性雑誌路線の円環の一つだった。（『日本近代文学大辞

典 第五卷』講談社 昭和五二年十一月十八日 初版）

石垣りんの自筆年譜（『現代詩手帖特集版 石垣りん』）によると、「青空美加」「夢路りん子」「石垣りん子」の名前で投稿をしていた。

一・初期作品リスト

〔凡例〕（ジャンルとして、作品名の下に（ ）（例えば「母に捧ぐ（詩）」で示した（詩）」は筆者の分類によるもの、作品名の「」の後の分類（例えば「生命頌 木陰・雲・風・表札」短章）の短章はそれぞれの雑誌の分類によった）

○『断層』

一九三八（昭和十三）年

一号 十一月発行「母に捧ぐ（詩）」「生命頌 木陰・雲・

風・表札」短章「同人語」

二号 十二月発行「ゆふぐれ（詩）」「生命頌（続）」短章

一九三九（昭和十四）年

三号 一月「樹木（詩）」

四号 二月「姉妹（詩）」

五号 三月「街のうた（詩）」「生命頌」短章「森 三那子

論「評論

六号 四月 石垣りん子抄「鄙唄(詩)」「影(詩)」「舟歌

(詩)」「生命頌／鼓動・春めく・弓」短章

七号(特別号)四月石垣りん子抄「鄙唄(詩)」「影(詩)」「舟

歌(詩)」「生命頌／鼓動・春めく・弓」短章

十号 七月「書庫断想(詩)」「らくがき(詩)」

十一号 八月「花の晨(詩)」

十二号 九月「我が家(詩)」

十三号 十月「波間の唄(詩)」

十四号年 十一月「帰り来る月(詩)」

十五号 十二月「水(詩)」

一九四〇(昭和十五)年

十九号 四月「魚のことば(詩)」

二十号 五月「行程(詩)」

二十二号 七月「出発(詩)」

二十三号 八月「帰ってくる(詩)」

二十四号 九月「花の午后(詩)」

二十五号 十月「水花の座(詩)」

二十六号 十一月「体操の街(詩)」

二十七号 十二月「遠い日のために(詩)」

一九四一(昭和十六)年

二十八号 一月「瀧(詩)」

二十九号 二月「慣例(詩)」

三十号 三月「帰途(詩)」

三十一号 四月「和合(詩)」「結合(詩)」「空(詩)」

三十三号 六月「背(詩)」「花(詩)」「自「齡(詩)」

三十四号 七月「人間像(詩)」

三十六号 九月「蝶(詩)」

三十七号 十一月「氷山(詩)」「章(詩)」

三十八号 十二月「空の童話(短編)」

一九四二(昭和十七)年

三十九号 一月「凱旋門(詩)」

四十号 二月「詩について」

四十一号 三月「顔(詩)」

四十二号 四月「入城(詩)」「希ひ(詩)」

四十三号 五月「望郷(詩)」

四十四号 六月「虹(詩)」「自由詩」「落下傘(詩)」

四十五号 七月「母の手(詩)」

四十六号 八月「色眼鏡(短編)」

四十八号 十月「契(詩)」「海女のうた(詩)」

四十九号 十一月「送別(詩)」

五十号 十二月「二つの帯留(短編)」

一九四三(昭和十八)年

五十一号 二月「扉(詩)」

五十二号 三月「手(詩)」

五十四号 五月「慕張行(短編)」創作 「地藏尊(詩)」 「悔

(詩)」

五十五号 六月「海を見る人(詩)」

五十六号 七月「短章」

五十八号 九月「短章」

五十九号 十一月「短章」

○『女子文苑』

一九三五(昭和十)年

五号 一月

※社友芳名一覧に名前が掲載されている。

九号 六月「春は」「おぼろ月」童謡

十号 七月「路」抒情詩

十一号 八月「思出」歌謡

十二号 九月「さみちゃんの見た夢」童話「あるこゝろ」

抒情詩「西洋館」童謡

十三号 十月「友情」抒情詩 俳句、短歌

十四号 十一月「片思ひなら」歌謡「運命」抒情詩 俳句

一九三六(昭和十一)年

三卷一号 一月「思ひ出」童話「義姉弟」戯曲「人形」自

由詩

三卷二号 二月「夕べの濱」抒情詩「ベット」自由詩

三卷三号 三月「あなたと私」抒情詩「うれしい頃」歌謡

三卷五号 五月「金色の汽車」童話「娘十八」歌謡「知る

故に」抒情詩 短歌、俳句

三卷六号 六月「呼び得ぬ声」抒情詩「米をとぐ」自由詩

「きんちゃく草の花」自由詩

三卷七号 七月「おかあさん」抒情詩

三卷八号 八月「お母さま」抒情詩「ふたりでゐと」歌謡

三卷九号 九月「爪」自由詩

三卷十号 十月「花街」断章「オリインピック放送の或る夜」

一九三七(昭和十二)年

四卷一号 一月「私は……」抒情詩「おしゃれして」童謡

四卷二号 二月「心の話」童話「ひとみ」抒情詩

四卷三号 三月「冬の朝」童謡「君と在れば」自由詩

四卷四号 四月「映畫館」抒情詩

四卷五号 五月「海の林」抒情詩

四卷六号 六月「働く」自由詩「星に寄せて」小品「ぎん

なん」童謡「壺」抒情詩

四卷七号 七月「眞球」抒情詩「地圖」童話

四卷八号 八月「夜」自由詩「花の晝」童謡 短歌

四卷九号 九月「遠い渚」抒情詩「小さき地球」断章

四卷十号 十月「匂ひ」童謡 短歌

四卷十一号 十一月「鈴」童話「生きてゐる街」自由詩

四卷十二号 十二月「編み物」断章「屋上」自由詩「煙草

盆」童謡 俳句

一九三八（昭和十三）年

五卷一号 一月「銀行」自由詩「英坊の日記」童話

五卷二号 二月「黒髪」抒情詩

五卷三号 三月「母」断章

五卷四号 四月「唇」自由詩「唇」抒情詩

五卷五号 五月「指」叙情詩

五卷六号 六月「夜」小曲「雪」童謡「勘定取り」短編

五卷七号 七月「希望」自由詩

五卷八号 八月「草」短詩

五卷十号 十月「生命頌」短章「ひととき」短編

五卷十一号 十一月「母に捧ぐ（詩）」

五卷十二号 十二月「生命（詩）」

一九三九（昭和十四）年

六卷一号 一月「樹木（詩）」

六卷二号 二月「生命（詩）」

六卷四号 四月「潮音（詩）」

六卷五号 五月「如來様」短文

六卷七号 七月「書庫断想（詩）」

六卷九号 九月「我が家（詩）」

六卷十号 十月「波間の唄（詩）」

六卷十一号 十一月「帰り来る月（詩）」

六卷十二号 十二月「おれん（短編）」

一九四〇（昭和一五）年

七卷三号 三月「雨の幻想（詩）」

七卷四号 四月「魚のことば（詩）」「川路先生にお話を聞く」

七卷五号 五月「日本語の夕（随筆）」

七卷六号 六月「六月の配置（詩）」

七卷七号 七月「出発（詩）」

七卷八号 八月「会の記（詩）」

七卷十号 十月「花の海（詩）」

一九四一（昭和十六）年

八卷一号 一月「荷（短編）」「子守唄（詩）」

八卷七号 七月「葬列（詩）」「座（詩）」

八卷八号 八月「花（詩）」

○『少女画報』

十二号と八号に投稿を確認した。

二十五卷十二号 昭和十一年十一月

「秋の枯葉（詩）」

「ねえやより（掲載外佳作）」

二十七卷八号 昭和十三年八月

「花（詩）」

以上、『断層』から四十九冊のうち四十八冊、『女子文苑』から八十一冊分のうち六十四冊、『少女画報』から六冊（昭和十一年十一月から昭和十五年六月までを確認）のうち二冊に、石垣りんの作品が掲載されていることがわかった。しかし、はじめにで記述したように、石垣りんの習作時代及びその作品について言及している先行研究はきわめて少なく、清岡卓行氏がわずかに散文作品の三作品に言及している程度なのである。

二．先行研究をめぐって

まずは清岡氏の言及（「石垣りんの詩」『抒情の前線』（新潮社所収 一九七〇年））について紹介したい。

清岡氏は『断層』『女子文苑』に掲載された石垣りんの詩作品については、「彼女のその頃の詩は、しかし、習作的で、儀礼的で、まだ自分の問題を赤裸々に呈示しようとはしていない。あたえられた観念によって自然やその当時の戦争に触れることが多く、技法の上では、それと見合ういくらかの象徴性が楽しまれているというところであろうか。今日読んでも感動がたわわってくるものは、やはり、私的な内部の真情が吐露されているものだけである」と、高い評価はあたえていない。

しかしその一方で、石垣りんの散文作品に関しては、「彼女のその頃の小説は、今なお読むに耐えるリアリティを蔵しているようである。」と高く評価しており、また、「読むことができたのは「荷」「色眼鏡」「幕張行」の三篇に過ぎないが、いずれも生々しく抜き差しならぬ庶民的な日常の情感がただよい、ほくはふと、シャルルルイ・フィリップの短編を連想したほどであった。」と高い評価を述べている。

清岡氏は『断層』『女子文苑』で発表された石垣りんの散文作品の「色眼鏡」「幕張行」「荷」に関して言及をしている。本稿では「色眼鏡」「幕張行」についての清岡氏の言及を後の項で紹介することとする。

次に安達氏の言及（安達徹「雪に燃える花——詩人日塔貞子の生涯——」（桜桃花会 一九七二年））を取り上げる。

詩人日塔貞子に関する文献で、石垣りんの作品自体に関する記述はないが、日塔貞子の同人仲間であった石垣りんが「つどい」という同人誌で活動していたとわかる個所がある。

「つどい」は吉村卓司、画家の深水正策、詩人で大学教授である那須辰造の三氏を中心にして、少女詩人らが集う雑誌であり、石垣りんは「石垣りん子」という名前で、「大人っぽい作品を書き」、「貞子のよきライバルであった」。

また石垣りんと日塔貞子の二人だけが、「つどひ」の同人で「断層」の同人でもあったという。

この「つどい」という同人誌に関しては、安達氏のこの文献でしか確認することが出来ず、現物等は入手できていないため、現在調査中である。

三 『断層』発表散文作品の検討

次に、『断層』で発表された散文作品について簡単に概要と考察を述べたい。まずはこれまでの先行研究では一切言及されてこなかった「二つの帯留」「空の童話」の二作品を紹介し、作品の検討を行う。「幕張行」「色眼鏡」に関しては簡単な概要と清岡氏による言及と、同人間における言及について紹介する。

「二つの帯留」（昭和十六年六月一日）

概要

「私」がまだ十代だった頃に、妹のようだと可愛がってくれた勤め先の男性である「川田さん」から木彫りの帯留を貰い、もうひとつを「津浦さん」に渡してほしいと頼まれる。その男性にたいして「私」と「津浦」さんは恋心を抱いており、二十を一つ二つ過ぎていた「津浦さん」は「結婚の対象」として男性を見ていた。

「私」にと先にくれた帯留の方があとのひとつよりも細工がずっとよくできているのに驚き、喜ぶ「私」。しかし、「津浦さん」に対する小さな勝利を感じているのに気付き、何とも言えぬ不安と不純な影を覚えた「私」は一体どちらを「津浦さん」に渡せば良いのかと迷う。

「私」は、「良い方を取ってしましていられる様なあつかましい人間であってはならない」と、「津浦さん」に良い

方を渡すのだった。しかし、「川田さんはこちらを津浦さんに」と言っていたのに、と心の声を聞くのだった。

その後「川田さん」と「津浦さん」はお互い別の人と結婚をするのだった。「津浦さん」は「川田さん」をどうしてもあきらめられないと言っていたが、最後は「子供が出来たらあの人の名前をつけるわ」とはずかしそうに言い、九州の方へ嫁いでいったのだった。

「私」はいかに想い決めた人でも、自分に対する愛し方と同じように他のもう一人の人を愛したなら、どんなにさみしくあきらめるだろうと思う。

「私」は、男の人が小さなことに気を使わないと自覚しながらも、女にとってはあの帶留めの金魚はもう金魚ではなくて、耐え難い愛情のしるしであり、ふたつの金魚を買ってくるような男の人をふたたび好きになるのは止そうと考えるのだった。

おそらく私小説であろうと思われるこの散文作品は、原稿用紙四十枚に満たない短編作品である。だが、戦後の詩や随筆では詳細には語られていない、特定の異性に対する、まだ少女期とも言える石垣りんの当時の思いが赤裸々に綴られていると見ることが出来る。

「空の童話」（昭和十六年十二月一日）

概要

一粒の「朝顔の種子」は静かに春の旅程を組みながら、去年「母」の懐にいた時に聞いた話を思い出していた。「母」は「種子」に「私の季節は終わってしまいが、お前は真直ぐ空に向かって伸びて行け、誰でも仲良くしなさい」と話していた。その教えのとおり、土の中で出会った「蚯蚓」に「空へ行ったら、きつと手紙を出しますから」と約束をして、「種子」は四月の朝に空を目指して出発をする。

「朝顔」の旅は小さい垣根に沿って、空へとたどって行く。春も過ぎ、やがて夏にさしかかる頃には可愛い蕾も出来たが、空はますます遠くなるばかりであった。

七月も半ばの頃、「朝顔」は垣根の小徑が切れて、雑草が生い茂る道に出してしまう。「空はまだまだ遠いのにと、空での開花を楽しげに待つ蕾たちを尻目に途方に暮れる。「朝顔」は病気になってしまったせいで、歩く気力がなくなっていたのだった。「朝顔」は母と居た頃の楽しい日を思い出し、繰り返し涙を流していた。

風の便りで「朝顔」の困っていることを知った「み、ず」は、「てんとう虫」に頼んで「何事も運命です、気をつけたり持って生きぬいて下さい」と手紙を持たせた。朝顔は

「そうです、私には空へ行く目的がございます。目的を果たさなければ死ぬことは出来ません。ですから蚯蚓さん、垣根の徑は終へてしまひました。生きて行くといふことは、定められた徑以外に進む事はできないのでせうか？　これが運命だ、等と思ふのは、あまりに情けないことです」と悲観した返事をする。

「蚯蚓」は大変可哀想に思い、考えた末「蜘蛛」の所に相談をしに行き、「どうか、その銀糸を、垣根の徑から空へ張つてやつてくれ」と頼むと「蜘蛛」は「朝顔の不幸は自分以外のものに空をもとめたところにある」と返されてしまう。「蚯蚓」と「蜘蛛」が「朝顔」をめぐって口論をしていると、「てんとう蟲」がもう一通の手紙を持ってやつて来た。

「本当は空に行く術がないのかもしれないが、私は空を空として考えてきた今までのまま終りたうございます。せめて自分だけでも裏切らないで死んで行きたうございます。自分が朝顔だったのか、空自身だったのか、今となってはわかりません。さようなら、蚯蚓さん。私は空への旅を続けます」

それを聞く「蚯蚓」が、切なく身悶える側で、「蜘蛛」は「てんとう蟲」に「私を案内してください。私の銀糸で此の木のとつぺんと、朝顔の徑をつなぎませう」

息も絶え絶えで今にも死んでしまひそうな朝顔は尚も空を眺めていた。するとその頂きから一條の糸が下がり、垣根を走つて地にとゞくのを「朝顔」は見つて、「空へ！」と一声叫び、黄色くなえた腕がその糸にかり、空への一步を踏み出したと思つた時にはすでに朝顔の生命は切れた銀糸とともに落ちていつてしまつた。

「蜘蛛」はうずくまつたまま、「蚯蚓」のころ、「朝顔」の生命、それから自分とをつなぐ不可思議な掟が土の香の中から、むんむんと沸いて来る息苦しさにも身動きもできなかった。

「てんとう蟲」は、「わからない世の中だ。私にわかるのは、自分の背中の紋が綺麗だといふ事だけだ。それさへもどうやらうそか、本当か。自分のもつてゐるものは、外と半々だからな」と呟いた。

「童話」と銘打つた表題だが、その内容は「童話」という生易しい響きにそぐわない、全体的に「死」のイメージがまといわれた、薄暗いものである。だがこの「死」というものの意識は、石垣りんの戦後の詩や随筆にはよく見られるテーマであり、随筆において、石垣りんはたびたび、「死」というものを自分は怖れていると記述している。

その背景に、実母と、後妻たち、妹たちという家族の度

重なる死があり、この「空の童話」はとりわけ実母の死という体験が影響した作品だと言えるのではなからうか。

また「花」というテーマの詩は石垣りんの戦後の詩作品によく見られるが、ここでも「花」「幻の花」「たんぼぼ」「種子」等があげられる。いずれの詩にも、ひそかに「死」を彷彿させるような描写がある。

この当時から、実母の「死」に関する特別な思いと、その「死」を「花」というモチーフによって描いていたことがわかる。

次に、「朝顔」を巡る「蜘蛛」と「蚯蚓」のやりとりについて、もう少し考えてみたい。

「君の気持はよくわかった。けれど、私はやはり、自分の垣根を持つてゐる。実在といふのかね？ ある物と物との間に介在する生命の一つが私のすべてだ。そこに希望や夢がある等といつても、それは此の世の愛嬌だね。あるまじきものを、心が勝手につくり上げたのだよ、けれどその心一つで、生命はどんなに美しく満たされることだらう……。私は或る物と物の間に銀線を張る。それは一本の銀線でしかないさ。が、私自身に云わせれば、その銀線の中に空があり、海もあるんだ。私は小さな蜘蛛であつて、蜘蛛それ自体の生活

はすべてのものを飽和してゐるんだ。幸せの根本は、こんな所にあるのぢやあないかね？ 朝顔は、自分以外のものに空をもとめた所に不幸があるんだ。ねえ蚯蚓さん、君だつて同じだよ、眼が見えないから、といつて、なぜ心に空を持たないのさ」

「いや、ありがたう。だが相談は前へもどるがね、一つその銀糸を垣根の上に張つてやつてくれないか。朝顔は朝顔だけの観念で物の範囲を決めてゐる。垣根より少しでも高い所へ徑が通つていれば、その向こうに空がある、と信じられるのだ」

「そこだ、けれどそんな事をしていゝのかね、私達の感傷で、大きな事実をごまかしてまで、朝顔を助けるのは考へ者ぢやないか」

「あ、でもそれは君の言ひ分だ。言ひ分なんてつまらないものぢやあないか。生きてゐる者同士、もつと慰め合はふよ。自分の立場なんて外から見たら僅少なもののさ。君が朝顔で、私が蜘蛛であつても、何の不思議もないだらう。皆が一緒に生きてゐる、といふ事だけが同じなんだからね。いつか自分を意識する力を奪われた後、誰が何だか知るものか。こんなことを云うと、何もかも型の上に建てられてゐるやうでさみしいがね、なまじ大きな云い分を持つて、血の通つた真情

を掘り下げるのは、君、薄情といふものだよ」

「空」という理想を自分の外側に求める「朝顔」を批判的に捉える「蜘蛛」と、「朝顔」の不幸に感傷的になる「蚯蚓」とのやりとりが描かれており、そこに石垣りんの人生観の一端を見ることができるとはないだろうか。

「幕張行」(『断層』昭和十八年五月一日発行)

幕張にある亡くなった義母の実家へ知恵遅れの弟と赴く私小説的な作品。石垣りんの家族、特に父に対する複雑な心情が綴られている作品である。

清岡氏はこの作品について、「おそらく作者の家族関係をモデルとしている私小説的な迫力のあるもので、彼女の詩を分析していく上では便利な資料ではある」と述べている。

「色眼鏡」(『断層』昭和十七年八月一日発行)

知恵遅れで「継母」から良い関心を向けられていない「弟」とその「義姉」を中心に語られた日常の物語である。

清岡氏は「知能の遅れた子供とその家族を縦糸とし、その遊び友達との関係を横糸として、いわば幾重にもむごたらしく他者化されている幼く愚かな人間の無心ぶりを冷静に

描いたもので、彼女の愛の一つの方向を予告するものであり」と述べており、同雑誌における同人間の言及では、橋本千枝子氏が「健全な思想と文章にその将来を期待されている石垣りん子さんの作品「色眼鏡」は多少かたすぎる位の所がありますけれど、その石橋を叩く式の文章は、学ぶべき所があると思ひます。忌憚のない御批判をのぞんでいませ」と述べている。

四・初期詩作品の検討

次に、『断層』『女子文苑』『少女画報』に掲載された散文以外の詩及び童謡についての紹介と簡単にだが検討を行う。

「母に捧ぐ」(『断層』昭和十三年十一月一日発行)

倒潰せし追憶の家屋の下

私達をしつかりと抱きしめてゐる亡母、

生々しい叫声をあげ 此の世運命の修羅城と化し 一面血

の海にかはるとも、

落ちくる懊悩の壁を支へ

身にかへて常に我等をかばふ。

思へば大正十二年 彼の関東大震災の日、
人々災禍にすべてをうばはれた時、

広き貴女のみ胸に寄せる 微かな震動さへあつたらうか、
あの恐ろしい一瞬時、

私達弟妹を抱きしめて離さなかつた！
あたゝかき愛の太陽、

子等の宇宙を永遠に照す 母よ、

十一時五十八分のサイレンが鳴る。

我等心の青空に、

おゝ実在する過去の響

母は生きてゐる！ 母は生きてゐる！

『断層』の第一号に掲載された詩作品であり、実母が亡
くなつたきつかけとされる関東大震災の時の実母の様子を
描いている詩である。

同年『女子文苑』の五卷十一号に同じ作品が掲載されてい
る。

童謡「おぼろ月」（『女子文苑』昭和十年六月一日発行）

春はお月さんも

ねむいのか

山の向ふで

トロンとしてる

いくら大きな

めざまし時計

リンリンならして

見たとても

高くて遠くて

お月さん

おねんねばかり

してゐます

石垣りんの『女子文苑』におけるはじめての掲載作品で
ある。選者の濱田廣介氏は同誌において「この思ひ付も面
白い。この思ひ付をこはさないようにして、もう少しこの
ユーモアを生かしてみたいと思はれる。つまり、これでは、
やや簡単に感じられる。」と評している。

現在では詩人のイメージが強い石垣りんだが、『女子文

苑』では詩や小説だけではなく、俳句や短歌、童謡と区分された作品の投稿も行っていた。

「秋の枯葉」(『少女画報』昭和十一年十月八日発行)

秋の枯葉

東京 青空 美加

季節の死

今日窓に

黒わくの

訃報を受く

秋の枯葉

石垣りんが『少女画報』に投稿した詩作品であり、また同誌上において同じ青空美加という名前で「ねえやより」という投稿作品が掲載外佳作として挙げられているのを確認することが出来た。

石垣りんの自筆年譜によると、「一九三六年(昭和十一年)五月、妹初江、千葉県伯父夫婦の養子となる。六月、妹蔦子急逝。」とあり、妹の死を受けて書かれた詩ではない

かと推測することが出来る。

おわりに

石垣りんの初期作品を探索し、かなりの数の作品があり、詩だけではなく短歌や、小説などの散文作品も投稿されているということがわかった。これらの作品は石垣りんという詩人を知る上で重要な手がかりになるのではないだろうか。本稿では深く取り扱わなかった短編「幕張行」には石垣りんを取り巻く複雑な家族関係がモデルとなっていると推察することができ、そこにおかれた石垣りんの既刊の随筆集や詩集だけでは窺い知ることの出来ない家族に対する心情が生々しく描かれており、考察の余地は十分にある。

本稿では掲載作品の簡単な紹介と検討を行ったが、今後は更にその作品ひとつひとつに対する考察や、戦後に発表された詩作品との比較やそれらに与えた影響などを詳しく調査していきたいと考えている。

(はた なつき・実践女子大学大学院 博士前期課程)